

氏名	原田 勇雅
ヨミガナ	ハラダ ユウヤ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第359号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 アンジェロ・マリアーニ、ジョヴァンニ・ボッテジーニ、アルトゥーロ・トスカニーニの歌曲作品研究 ―イタリア歌曲の新しい演奏レパートリーの開拓に向けて― 〈演奏〉 A. Mariani:《ジェノヴァ海岸のこだま》 他

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	甲斐 栄次郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	佐々木 典子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	畑 瞬一郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	福島 明也
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		青島 広志
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		園田 みどり

（論文内容の要旨）

本論文は19世紀中葉のイタリアで活躍した音楽家、アンジェロ・マリアーニ Angelo Mariani (1821～1873)、ジョヴァンニ・ボッテジーニ Giovanni Bottesini (1821～1889)、及びアルトゥーロ・トスカニーニ Arturo Toscanini (1867～1957) による、1850年ごろから1880年代に出版された室内歌曲作品を対象として、それぞれの特徴を楽曲分析によって明らかにし、現代において歌われるべき作品群として演奏家の視点により考察を行う。そして19世紀中葉のイタリア歌曲作品群における未知の領域を探求し、これらの作品の芸術的価値を検証する。マリアーニ、ボッテジーニ、トスカニーニの3人はオペラ、オーケストラ指揮者として、あるいは器楽奏者として、19世紀中盤以降に活躍した音楽家である。彼らの歌曲作品には、イタリア・オペラの「5大作曲家」、「80年代世代」及びトスティのような作曲家とは異なる、指揮者、演奏家としての独自の傾向が認められるのではないかと考えられる。また、反映されているとすればどのような点にそれが認められるのか。本論文では、実際に楽曲を演奏する声楽家の立場から、楽譜を詳細に検討することで、上記2点について明らかにしてゆく。日本、ひいては世界の声楽家にとって魅力的なレパートリーを開拓することを目指すものである。

出版状況などを述べた序論に続いて、第1章では、マリアーニの68曲確認されている歌曲作品から、歌曲集《ジェノヴァ海岸のこだま Eco delle riviere di Genova》(1860年頃、ルッカ社、全10曲)について分析を行った。曲集全体を通して、マリアーニはヴェルディやベッリーニ、ドニゼッティといった同時代のオペラ作曲家同様に、旋律重視の形式を下地にしながらも、変化有節形式や通作形式の中で斬新な表現方法を試みている。和声も19世紀中期のロマン派歌曲の先端をいっていると見てよい。ニュアンスの指示も顕著で、マリアーニがオペラ指揮者としての経験を元として作曲していることの証左である。ピアニストは単なる伴奏ではなく、オーケストラさながらに情景描写を積極的に表現し、時には歌手以上に雄弁に音楽の主導権を握らなくてはならない。まさに指揮者が作った作品群であるといえるだろう。詩人の中ではペンナッキの作品が多いが、マリアーニは実在の軍楽的な楽曲を挿入しており、楽譜、音楽から見る限り、彼は祖国が踏み躪られる様な戦争に対し、懐疑的な思いがあったに違いない。1860年頃のイタリアで第一線にいた音楽家が、こうした楽曲を歌曲集の冒頭を含めて出版することの社会的意義は大きい。

続く第2章では、ボッテジーニの71曲確認されている歌曲から、歌曲集《東方の夜 Notti d'oriente》(1876～77年、カンティ社、全7曲)について分析を行った。

分析により、特徴としてまず挙げられるのは、オーケストラの書法を歌曲の作曲に取り入れていることである。弦楽器、管楽器などの書法やテーマの変奏、対位的書法の使用などが見られた。これらはポッテジーニが器楽的な作曲技法を駆使して創作していることの証明である。またピアノパートの旋律が、しばしば低音部に表現されることが多いことも、コントラバスのパガニーニと呼ばれたポッテジーニならではの特徴である。コントラバスの曲において、技巧を凝らしていたポッテジーニが、歌曲においては、激しい動きよりも詩の内容に沿って美しい旋律を紡ぐことを大切にしていたことは特筆すべき点である。

第3章では、トスカニーニの歌曲作品について、全19曲中7曲を選んで、分析を行った。トスカニーニ作品においては、ピアノパートにおけるチェロの書法や、ハープ、ギター、シンコーペーションの多用による情感の高まり、水や風などの情景描写などにオペラ指揮者としての経験が垣間見えたが、その作風はむしろ近代歌曲作曲家としての一面が顕著であった。違う和音を同時に奏したり、調性の確立を避けた厭世的な曲想の作曲法、下行音形を動機として楽曲中に度々使用、ドビュッシーを思わせる全音音階、ほぼ全ての曲に見られる歌唱パートにおけるうねるような音形、Ⅲ度の和音のトニックとしての使用、など、多くの特徴が見られた。間違いなく、当時において時代の先端をゆく和声による作品群である。その活動の初期に作曲活動が集中していることを考えると、歌曲作品における前衛性が、その後数々の新作オペラを初演していく、オペラ指揮活動における音楽的な見地の下地となっていると考えられる。

分析の積み重ねから、マリアーニ、ポッテジーニ、トスカニーニはそれぞれオペラ指揮者としての経験や器楽奏者としての個性を、室内歌曲作品の作曲の中で発揮していたことが明らかとなった。3名の特徴をよりいっそう正確に把握するためには、これら同時代の創作活動について、継続して調査・研究することが不可欠である。また、本論文で取り扱った作品は、現時点ではその存在が広く知られているとは言い難い状況である。何よりも待たれるのは、やはり信頼のおけるモダン・エディションの出版と、それを用いた演奏の機会の普及である。演奏家として研究を一層深めていきたいと思う。

#### (論文審査結果の要旨)

題目は、『アンジェロ・マリアーニ、ジョヴァンニ・ポッテジーニ、アルトゥーロ・トスカニーニの歌曲作品研究 —イタリア歌曲の新しい演奏レパートリーの開拓に向けて—』とあり、19世紀中葉に活躍した音楽家(指揮者)3名の作曲した歌曲作品に焦点を当て、選曲された歌曲の楽曲分析により、それぞれの特徴が一演奏家(歌手)の視点により「演奏を目的とする」という形で論じられている。音楽家ごとに第1章、第2章、第3章が割り当てられ、各章ごとに、第1節で音楽家としての背景や生涯に触れ、第2節で選曲された歌曲についての分析が行われている(マリアーニ10曲、ポッテジーニ7曲、トスカニーニ7曲)。分析においては、詩の世界が音楽によって如何に表現されているかを考察。分析作業そのものは丁寧で、的確に行われている。一方で、音楽的に際立つ特徴を明確に導きだすには至っていない面もある。「演奏にあたって」という項目には、演奏家だからこそ、実際に歌唱することで見つけることができた歌う際の注意点や、技術的に必要とされる課題が記されている。演奏家としての視点により、「演奏されてこそ真価を発揮するもの」ということが、この研究の結論となるのであるが、ややもすれば日の目を見ることなく消えていきかねない歌曲作品に、光を当てたという意味では大きな評価に値するものと言える。

#### (演奏審査結果の要旨)

学位審査の演奏は、2022年2月17日(木)18時開演 第6ホールにて行われた。論文でも取り上げた3人の歌曲作品、マリアーニ5曲、ポッテジーニ3曲、トスカニーニ5曲でプログラムを構成し、ピアノ伴奏に加え、ポッテジーニの3曲中1曲はピアノ・コントラバス伴奏版、2曲はピアノ・弦楽五重奏版、独唱曲に加え、二重唱と三重唱もあり、それぞれの作風を表す特徴的な曲が選曲されており、声、楽器の共演により、十分に聞きごたえのある演奏会となった。歌唱においては、もともと高いレベルの歌唱能力を持っているという前提で、音域の広い作品においては、特に低声部に表現の幅が若干制限された場面や、

音域や音形の影響でイタリア語の明瞭さに少々欠けるというところもあった。プログラム全体を通しては、楽曲分析による成果という意味で、また、演奏される機会の少なかった作品に命を吹き込み、魅力ある演奏へと繋げたという意味で大きな成果である。

博士課程において、現地での調査や資料収集にも積極的に取り組み、音楽家自身が、歌手として歌われるべきと考える歌曲を歌唱へと繋げるため、長期にわたり真摯に取り組んできたことは、音楽界に対してひとつの功績となったと言える。よって、博士学位に相応しいと評価し、合格とする。